
松永久秀を受け継ぐ者

百花繚乱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

松永久秀を受け継ぐ者

【Nコード】

N2595Z

【作者名】

百花繚乱

【あらすじ】

梟雄…

松永久秀の血を色濃く引き継ぐ者が異世界を巡り欲望のままに生きる…その名を松永久志まっながひさし

松永久秀を受け継ぐ者

人には…

欲望があり…

それを自制する…

何故だ…？

欲望のまま生きていけば良いではないか…

言葉では何と言おうと人間は欲望には逆らえない

では私とそのタガを取り除くとしよう…

何、卿達はただ我慢しているだけだ…

私が見本を見せよう…

そうだな…

私は宝を集めるのに凝っていてね…

それが例え人の物でも欲しくなる…

ならば簡単だ…

奪えば良いのだからな。

ではまず手始めに…

曹操の持つ宝…【絶】を頂くとするか。

待っていたまえ…

曹孟徳殿…

一話（前書き）

やっちゃったZE!!

宴をやっていたら書きたくなりました（笑）

一話

私の前に現れた一人の制服をきた白髪の青年

何やら変な銅鏡を持って急に襲いかかってきた…

青年「ぐう、貴様…！！何者だ…！？」

その青年は今、私の足下…否、私の足で動けない様に踏みつけている

『可笑しな事を言うのだな…卿は私に襲いかかってきた。命を奪われる覚悟など出来ているだろう？』

青年の持っていた銅鏡を拾い手にとって見てみる

青年「貴様！？っ返せ！？」

この青年にとってこの銅鏡は大事な物らしい

『これは随分と古い銅鏡だな…卿の宝かね？』

青年「貴様にはどうでも良い事だ！！これ以上外史に余計なイレギ
ユラーを入れる訳には！？」

ズンッ！！

踏みつける足に更に力を入れて踏みつける

青年「ぐあー！？ぐううう！？」

『私が卿に言ったのはこれが卿の宝かどうかだ…それ以外の答えは
求めていないのだよ。』

声を低くし、問いかける

青年「あ、あぁー！！そつだよ！！俺の宝だ！！」

身の危険が分かったのか素直に話す青年

『そうかね…では卿からはこの宝を贖うとしよう』

青年「何だと！？ふざけるな！？これ以上外史に余計な物はっ！？」

グググ…

更に足に力を加える

青年「ぐああああ！！！！！！？」

『私は欲望に忠実なのだよ…他の者の宝でも欲しい物は貰い、奪う。』

青年「ぐう！？なら取引だ！！お前の求む宝がある世界にお前を飛ばしてやる！！」

『ほう?』

踏みつけていた足の力を弱め…

『興味深い話だ…是非聞かせて貰おう』

左慈「俺は左慈、外史の管理者だ。」

『建前は結構、卿の言う話をしたまえ』

左慈は軽く舌打ちしながらも答える

左慈「三国志を元にした世界…それを我々は外史と呼び、もし曹操が天下を統一しなかったら?もし赤壁の戦いで魏が勝ったら?とい

うIFの世界の事だ。」

『その世界に私を連れて行き、欲望のままに生きる…そう言うのかね？』

左慈は頷く

左慈「ああ、現在その世界は一人の異物がその外史に入りこんでいる。奴がいる限りその外史に直接手を出しにくい。その外史がその異物を認めてしまったからだ。その外史を壊す事もやり直す事も出来ない」

『ならば私がその外史を欲望のままに壊してみようかね…』

左慈「何だと…？」

左慈は目を見開く

左慈「それは俺にとってはありがたい事だが…何故協力するような真似を…」

『卿はそれ以外の世界や外史に私を送りこむ事は出来るかね?』

左慈「なに…? ……出来ない事は無いが。」

『私は宝を集める事に凝っているのは知っているだろう? ならば私がその外史を破壊する代わりに私を色々な世界に送りたまえ。』

左慈は考える

不測の事態に陥った世界や外史は基本的に放置されているが消した方が良い

何故ならその外史や世界に神や上の連中が面白がって転生者を送りつけたりもする

左慈「成る程な…俺も上に振り回されるのは飽き飽きしていた所だ…お前の案に乗る。今から送る外史を充分に破壊したら俺がお前迎えに行く。手に入れた宝は持って行けるから安心しな。」

『ならば卿とは契約しておくか…利害一致はするから金は無いがね。』

左慈「あっても使えないようなものだからいらんさ。では改めて俺は左慈だ。」

『私は乱世の梟雄松永久秀の血を色濃く引き継ぐ者…』

松永久志だ。』

ここに外史の管理者との契約は成った。

後は欲望のままに生きるまでだ…

プロフィール

【松永久志】

(まつながひさし)

男

年齢 27

身長 183

体重 75

データ

梟雄松永久秀の子孫。松永久秀同様己の欲望に忠実に生きる男。自分と欲しい物以外はこの世に存在せず、欲望を満たすために他を圧して踏みにじることを、躊躇わない。

また、非常に知的な人物で、人間の本质を見つめる事をよしとし、本能と欲望のままに生きる事こそ世の正しい姿であると考えている。ただひたすら己に純粋な男。

自分に忠実な人間や対等な人間、自分の認めた人間には多少の融通はあるようだ。

技や剣技は松永久秀と同等かそれ以上

一話（前書き）

BASARA3 宴のセリフが結構あるかも…

二話

松永久志がこの世界に来る前に左慈から情報を貰っていた…

『反董卓包囲網…逆賊董卓を炭と化する戦か…曹孟徳もこの戦に参加しているな。丁度良い…【絶】と言う名高い宝を頂くとしよう』

反董卓連合の北郷軍が虎牢関を突破した頃…

伝令「伝令！！制圧の最中に…砦の中に呂布が現れました！！！」

一刀「呂布だと！！！！？」

桃香「御主人さま…」

朱里「予定通り愛紗さんと鈴々ちゃんと星さんで呂布さんに当たって貰います」

朱里の指示に従い三人は呂布のいる場所まで移動するが…

春蘭「呂布……！華琳様の為に貴様を討つ……！」

秋蘭「待て姉者、呂布は捕らえるのだぞ？呂布、貴様に恨みは無いが華琳様の為お前を捕らえる！」

曹操軍

姉妹将軍

夏侯惇

夏侯淵

出陣……！！

愛紗「曹操軍と共同作戦になってしまっが……」

星「今は戦の最中、卑怯などとは言ってられん」

鈴々「いくのだ!!!」

恋「…五人まとめてかかって来い」

呂布達が戦おうとするその瞬間

ドゴオオオオン!!!!!!

爆音と共に虎牢関が炎に包まれた…

春蘭「なっ何だ!!!?」

愛紗「まさか敵の罠か!!!?」

恋「…違う。恋、知らない…」

星「そんな事よりマズイぞ!？」

秋蘭「炎に囲まれたか…」

鈴々「暑いのだ…」

その炎の壁から一人の男が現れた

『しぎげんよう、三国の将達。』

天我独尊

松永久志

乱入

『さて…卿達の宝を貰おうか』

伝令「伝令！！虎牢関にて爆発が発生！！」

一刀「何だと！？愛紗達が心配だ！！」

桃香「うん、行こう！！御主人様！！」

伝令「虎牢関にて爆発が発生！！夏侯惇將軍並びに夏侯淵將軍の隊から援軍要請あり！！」

華琳「マズイわね…桂花！！」

桂花「ハッ！！今すぐ援軍を送ります。」

華琳「私も出るわ…絶を」

桂花「しかし…」

華琳「私は部下を見殺しになんてしたくないのよ。」

桂花「…畏まりました」

場所は移って松永久志へ

『もう諦めたまえ…卿一人生き残ってどうなる？』

恋「ハア…ハア…」

呂布は傷だらけで立っており、他の関羽達は倒れていた…

恋「お前…何者…」

『何、覚えなくて結構。直ぐに卿も逝ける』

恋「クッ！…！」

呂布の繰り出す方天戟は神速の張遼と変わらずかそれ以上の速さ…
だが…

『ぬるい』

キーン！！

右手の剣撃だけで防がれ…

ガシツ！！

松永久志の左手が呂布の首を掴み、その腕力だけで宙に浮く呂布

恋「カツ…ハツ…」

『卿から見出だせる価値は…』

左手から黒い砂…火薬が舞い…

ボガアアアアン!!!!

爆発した…

『何も無しか…そうならそうと早く言いたまえ。』

ドサッ

松永久志が左手から呂布を離すと呂布は糸の切れた人形のように崩れた…

『さて…後は曹孟徳、卿の宝を頂くとしよ』

松永久志が虎牢関の門からゆっくり歩いて出て来る

その時、大鎌を持った金髪の少女と白いキラキラした服を着た青年が居た

華琳「貴方…何故春蘭の武器持っているの!？」

一刀「それにあれは愛紗の青龍偃月刀!？」

『この武器は中々珍しい素材で出来ているのでね…私が貰ったのだよ。』

淡々と答える松永久志…

華琳「…答えなさい!!春蘭と秋蘭は何処だ!!!？」

一刀「愛紗は!?!鈴々に星は何処なんだ!!!？」

二人は焦燥感に駆られながらも、虎牢関から部下が使っていた武器を持って出てきた男に問いかける

『何だ？卿達は炭を眺めるたしなみでもあるのかね？』

ガシャン

一刀の持っていた剣が地面に落ちる

一刀「そ…んな…」

華琳「春蘭…秋蘭…」

二人が悲しみに涙を流すも松永久志は行動した…

『さて、曹孟徳殿…卿の宝、【絶】を渡したまえ。なに、これ以上無駄な血は流したくないだろう？』

華琳「ふざけるな…ふざけるな…!!!!無駄な血だと!?二人の流した血が命が無駄なんて事にはさせない…!!」

一刀「仲間の仇は討つ…桃香…朱里…雛里…お前達が此処に居なくて良かった…今の俺の顔は酷いと思うから…」

華琳「私は貴様を…!!」

一刀「絶対に許さない…!!」

華琳と一刀が久志に突っ込む

一刀「俺が呂布との戦いに参加させてしまったから…許してくれ!!
!愛紗!!鈴々!!星!!」

華琳「春蘭、秋蘭…ゴメンなさい。今だけは霸王を捨てる…!!どんな事をしてもしこいつを殺す…!!」

『復讐かね？死んで逝った部下達が哀れだな。』

華琳と一刀の攻撃を軽くいなしながら構える

一刀「何が天の御使いだ！！何が御主人様だ！！俺は結局何も出来なかった！！」

『確かに、卿が本当に彼女達を案じていたら戦に出すべきではなかった。天の御使いなどと持ち上げられて調子に乗っていたのではないかね？可哀想に…彼女達は卿の迂闊さによって死んでしまったも同然だ。』

一刀「俺は…俺は…うわあああああ！！！！！！」

華琳「貴様は灰では済まさない！！細切れにしてやる！！！！」

『 卿の力量では無理だ。復讐に囚われた霸王など最早霸王では無い。ただの弱卒だ…』

ザシユ!!!

一刀「ガ!!!? ギイ!!!?」

松永久志の宝剣が一刀の脇腹を抉る

華琳「北郷!?!」

ガシッ

華琳「カハッ!?!」

『 卿から見出だせる価値は…』

華琳が一刀に注意が向いた瞬間に松永久志の左手に捕まった

ボガアアアアン！！

『闇か…酷くありふれた物だな』

華琳「あ…」

ドサッ

一刀「曹そ…」

『余所見とは随分と余裕だな。』

ズバン！！！！

横一線に斬り付けた

「刀「ゴプツ…!？」

ぶらん…

『おや？腰から下を切り落としたつもりだったが…背骨と皮でつながっているに過ぎないか…』

ドサツ…

『やっ…』

久志は絶を手に持ち…

『これは良い宝だ…あれだけ打ち合ったにも関わらず、刃こぼれが無いとは。私の秘蔵の嗜好品がまた増えた…次なる宝は何処にあるか…』

ザッ

華琳「待…ち…なさ……………」

『おや？霸王、まだ生きていたのかね？火薬が足りなかったか。』

華琳はボロボロで片肘を付きながらも松永久志を睨み付ける

華琳「許さ…ない…」

『ほっ…』

久志は華琳に近付き…

ガシッ

首を掴み自分と同じ視線まで上げる

華琳「う……………ああ……………」

苦しそうにしながらも松永久志を睨み付ける華琳…

『良い眼だ…卿からはまだ宝を産み出す価値が残っているのかも知れないな…もう一つの者は途切れてしまったようだが…』

血を流す一刀を見る

『気が変わった、卿にはまだ生きていて貰おう。人もまた、宝を産み出す大事な役割がある…卿からはそれが見えそうだな。』

松永久志は華琳を左手で抱えて戦場から消えた

その後、反董卓連合は天の御使いと曹操を失うも虎牢関を突破、洛陽からは董卓と賈馱は発見されなかった

その後曹操軍は自然消滅し、北郷軍は辛うじてあの場で生きていた北郷一刀の言で劉備が跡を継いだ

その後、北郷一刀は華佗の治療により一命はとりとめたが、最早完治するまで何年かかるか解らない状態だった

一方松永久志は左慈がくれた屋敷に戻っていた。

『さて…卿は全身に擦り傷や切傷、後は火傷か…服も焼けているから面倒だな。』

華琳「なん、の…つもり…？」

『卿の眼が気に入った。いずれ私を殺すまでに卿は宝を産み出してくれたまえ。なに、復讐の機会をくれてやるのだ…私の気に入る宝を産み出す事位安い物だろう。』

華琳「……………」

華琳は殺気の籠った眼で睨み付ける

『まあ、その前に卿に死なれても困る。全身に秘蔵の薬を塗る。効果は保証しよう。』

そう言うと久志は華侘のボロボロの服を破り取った

華琳「っ！？貴様……………！」

『ほう…随分と綺麗な身体だな。まあ良い。』

久志は華琳の服を全て破り取り、華琳は産まれたままの姿になった。

華琳「貴様……………！」

身体が動かない為胸や股を隠せない華琳は身をよじる

『この薬を全身に塗る。効果はあるが副作用で身体が燃えるように熱くなるがね。なに、死にはしないだろう。』

松永久志はボトルのような容器から蓋をとり、華琳の身体に液体を垂らしていく。

華琳「あつ…!!うん…ふっ…あ…//」

『副作用はまだな筈だがね…これで良からう。』

松永は布を華琳の身体に被せ…

『次の日には楽になるだろう。私はこれから再び宝を求める。卿は寝たまえ。』

そう言つて松永久志は出掛けていった…

袁術軍に取り込まれた孫策軍が民の暴動を鎮圧するため、家臣を全て収集している頃…

『袁術か…玉璽なる宝を持つ暗愚か。その宝を頂くとしようかね。』

松永久志は再び歩を進めた

伝令「伝令！！孫策が暴動した民と共に攻めこんできました！！！！」

美羽「な、なんじゃとー！！！！？ええい孫策め！！妾の恩を忘れたのか！！！！？七乃！！あいつ等を追っ払うのじゃ！！！」

七乃「うん、無理」

美羽「即答！？」

七乃「だって戦の天才孫策さんですから…お嬢様と私が逃げるまでの時間稼ぎをお願いします。危ない時は降伏して貰ってかまいませんので。」

伝令「はっ！！お二人もご無事で！！！」

伝令の兵は言を聞くと部屋を急ぎ足で出ていく

七乃「さ、お嬢様。脱出の準備を…」

美羽「な、何故この妾が逃げなければいけないのじゃ！！？孫策ごときに！！？」

七乃「そんな事言ってる場合じゃないですよ。もしここで孫策さんに見付かったら……」

美羽「み、見付かったら……？」

七乃の右手を首に持っていていき、横一線になぞる

七乃「首チヨンパ、です」

美羽「首チヨンパは嫌なのじゃー！！？」

七乃「なら早く逃げますよー！！」

美羽「うう…何故妾がこんな目に…」

二人が脱出をしている頃…

雪蓮「全軍突撃！！袁術の首をとる！！！」

その言に兵士たちが猛り、士気が上がっていく

思春「雪蓮様！！御自重して下さい！！！」

雪蓮「私の手で袁術ちゃんの首を斬らないとね」

思春「（駄目だ…既に聞いていない…）」

ボガアアアアン！！！！

雪蓮「っ！？何！？」

思春「解りません！！雪蓮様、一度引いて下さい！！」

雪蓮「…この爆発…城から…？」

伝令「伝令！！袁術の城から火の手が上がっています！！」

雪蓮「なっ！？何ですって！？」

思春「我々以外にも袁術軍を攻めこんでいるのか！？」

孫策軍に動揺が走る…

雪蓮「急がないと袁術ちゃんの首が先にとられる…孫呉復興の邪魔はさせない！！！！」

一方その頃…

七乃「お嬢様！！お嬢様を離して下さい！！！」

『袁術殿、私は卿の持っている玉璽が欲しいのだよ。』

美羽「あ……う……」

美羽は松永久志の左手に捕らわれていた…

あの危険な左手に…

『ふむ…玉璽さえ貰えば卿の命は助けるのだが…探すのは面倒だが…卿はもう用無しだ。』

美羽に黒い砂…

火薬が舞う…

七乃「待って下さい！！玉璽の場所なら私が知っています！！ですからお嬢様を…」

『知っているなら先に教えたまえ…まあ今更だがね、見せしめに卿の主には炭になってもらう…』

松永久志は腕に力を入れ…

七乃「なら私を代わりに！！！！」

美羽「な…な…なの？」

『ほう、この暗愚の代わりに卿が死ぬと言っのかね？卿のような人間は自分が助かれれば良いという考えだと思っっていたが…』

ドサツ…

松永久志は美羽をその場から離す

美羽「…ほ…ほ…！」

『ならば卿に案内して貰おうか…その後、卿の命は貰う。』

七乃「…はい。」

美羽「七乃！？駄目じゃ…！」

七乃「お嬢様…ここから真っ直ぐ進むと馬車があります。まだ孫策

さん達は来ていません。一人でも必ず生き延びて下さい」

美羽「七乃もいつじよに…来て…ほじいのじゃ」

美羽は泣きながら七乃に飛び付く

七乃「お嬢様…生きて下さい。」

トン…

美羽「あっ…」

ドサッ

七乃の美羽の首の後ろを叩き、気絶させる

七乃「お嬢様を…お願いします。」

馬車の護衛の兵士に美羽を預ける

兵士「…はっ」

『もう良いかね？』

七乃「はい、こちらです。」

七乃は美羽の寝室へと向かった…

七乃「この部屋です。この部屋の机の引き出しに入ってます。」

『ほう、随分と立派な部屋だ。寝るだけの部屋にしてはおいしいな。』

松永久志は引き出しを開け、玉璽の入っている袋を取り出した

『ほづ…金色に輝くとは誠だったとは…これは良い宝だ…』

ガキイン！！

その瞬間後ろから剣が降り下ろされるも松永久志は焦る事なく防いだ。

七乃「なっ！？」

『後ろから斬りかかれればもしかしたら…生き残りたいという欲望に従って私を斬りつけるのは良いが、殺気が漏れ出していた。』

ガキイン！！

七乃の剣を弾く

七乃「あっ！！！？」

ガシッ！！

七乃「あぐっ！！」

七乃の剣を弾いて直ぐに七乃の首もとを掴む

『卿の命、身柄は既に私の物だ…その約束を違えるのは少々赦し難いな』

七乃に向けていた視線を室内の寢床に向ける

『ふむ…私もこっちの欲を処理するのは久しぶりだな…卿の肉体で私の欲望を受け止めて貰うとするか…』

七乃「なっ！？」

七乃を寢床に押し倒し、衣服を破り捨てる

七乃「いや、離して下さい！！」

『卿は発育も見た目も上々……少し楽しみだな。』

七乃「嫌、嫌アアアア！！！！！！」

『クハハ、中々良い身体だな。既に8回は中に出したと言っのにまだ収まらないとはな。』

七乃「うあ、あっ…は、あん…ハア、ハア」

『まあ良い、卿はこれから私の性処理の道具として貰おうか。』

そう言っつて再び中に出す松永久志…

七乃「ああああ…ハア…ハア…」

『ではそろそろ終わるとしようか。卿はもう私の肉奴隷だ。』

七乃「…はい、私は貴方様の肉…奴隷です。」

そう言っつて二人は城から出ていった

七乃の目には光が既に無かった

孫策軍はその頃…

雪蓮「結局、謎の軍って言うのもいなかったし…袁術達は逃がしち
やったし…」

冥琳「しかし、この爆発が何処かの軍が使えるなら相当な脅威だな
…」

雪蓮「うん…でも今は母様の地を取り戻せた事を喜びましょう」

冥琳「…そうだな。」

こうして袁術は歴史の表舞台から姿を消した…

歴史の裏では松永久志が暗躍していると知らずに…

三話

松永久志は酷く飽いていた…

夏侯惇の七星麒麟牙

関羽の青龍偃月刀

曹孟徳の絶

そして玉璽

この世界に来て手に入れた宝が、まだ四つしか手に入っていないのだ…

曹孟徳こと華琳は松永久志が拐い、張勳こと七乃は肉奴隷。

そして早くも六つの月が経つ…

『半年が経ち、宝は四つ…最初に宝が簡単に見付かったと思えば…
そう簡単に見付からないから宝と言つべきか…』

華琳「あら？私の宝は気に入らなかったのかしら？」

『卿の音色はこの乱世には酷く綺麗に流れる…卿の歌声は一寸の宝
とも言つべきか…』

曹孟徳から見出させた宝は詩…

音色は声…

宝とは物だけとは限らないようだ…

『卿にはまだまだ宝としての価値はある。だが卿の復讐の心はどう
したのかね？』

華琳「私の貞操を奪った所から貴方に対する殺意は薄れていったわ…
私も人間、欲望と快楽には逆らえないと言つ事よ。」

『欲望のままに生きる。それが人のあるべき姿なのだよ。』

松永久志は家の縁側から立ち上がり、武器を手に取る

『華琳、七乃、卿達に留守を任す。私は宝を求めるとしよう』

七乃「はい、久志様。」

華琳「私の怪我なら治ったから一緒に行っても良いのだけど？」

松永久志の薬で怪我の痕も無くなり、随分暇そうにしている華琳だった…

『卿から見出だせる宝はまだ価値がある。そこにいたまえ。』

こうして松永久志は再び戦場へと向かうのだった…

曹操が歴史の表舞台から居なくなった事により、袁紹軍が巨大化した

劉備は孫策と同盟を結成。

袁紹率いる百万人の軍

対する劉備、孫策連合は五十万

天下分け目の戦い…

舞台は赤壁の地にて始まるつとじていた。

だが…

そこには異質なる影、松永久志の姿があった

彼にとっては未来を占う戦などではない

彼の耳には、剣戟も喧騒も聞こえはしない

興を惹いたのは孫策のもつ南海霸王

松永久志は曹孟徳の絶同様、その武器と言う宝を欲した

そしてついに歴史の裏を暗躍する松永久志が歴史最大の戦に乱入するのであった…

『風が吹き、火計が成ったか…さて、孫伯符が持つ南海霸王を貰う
としよう。』

船が燃え、大火計となった赤壁。

そんな中、孫策は袁紹のいる本陣まで辿り着き…

雪蓮「袁紹、貴女の首は私が貰うわ」

麗羽「この程度で勝ったと思わないでくださいまし…!!猪々子さ
ん!!斗詩さんやぁーっっておしまいなさい!!」

猪々子「へいへーい。」

斗詩「もう文ちゃん、ちゃんとやらないと…」

雪蓮「貴女達程度が私に挑むつもり？」

三者睨み合い…

だが…

雪蓮「（ビクッ！）誰！？」

雪蓮が対峙している二人から真横を向き、戦闘体制をとる

猪々子「誰か乱入してきたのか？」

斗詩「ただの兵士…な訳ないよね…」

二人も雪蓮にならない真横に向き直り武器を構える

『じぎげんよう小霸王。卿の宝を貰いにきた。』

天我独尊

松永久志

乱入

パチンッ

ドゴオオオオン！！

松永久志が指を鳴らすと辺りが爆発した…

雪蓮「その爆発…貴方が袁術ちゃんの城を爆破したのね…」

『袁術…？すまないな、その名に覚えがないのだよ。』

雪蓮「まあ良いわ、私と貴方…今は敵みただし。」

『その宝を渡せば命までは取らないが？』

雪蓮「その心配は要らないわ…私が貴方を斬れば良いだけだから！
！」

ガキーン！！！！

『^{とら}やれやれ…手間のかかる事はしたくないのだがな。見たまえ…^{かけ}景
虎』

周囲に火薬を撒き、自分の周りを爆破するとともに前方に炎の竜巻
が生まれる

雪蓮「なっ!?!」

雪蓮は真横にかわす

猪々子「私達の勝負の邪魔をするなあ!?!?!」

猪々子が大剣を松永久志に降り下ろすが…

ガキーン!!

右手の剣だけで防がれる

そして…

『塵晦』

ガシッ

パチンッ

斗詩「えっ？きやあ！！？」

指を鳴らすと地面から巨大な岩塊が現れ斗詩に直撃する

『さて、後は卿だけだ…』

雪蓮「クッ！！（あの左手は注意しなきゃ…あの黒い砂が爆発の元みたいけど…）」

『そんなに離れていては卿の攻撃は届かないが？』

雪蓮と松永久志は10メートル程離れている

雪蓮「それは貴方もね。」

『さて…それはどうかな？』

パチンッ

雪蓮「っ！？さっきの岩塊か！？」

サイドステップでかわし一気に近づく雪蓮

『消える』

左手で前方に火薬を撒き右手の剣で火花を起こす

ポオオオ！！

火が三列になって前方に進む

雪蓮「っ！？チイ！！」

南海霸王を前に翳し、防御体制をとる

雪蓮「あっ…っいわね…」

『これも防いだかね？』

松永久志はそのまま前方に素早く突っ込み…

『フン』

ガキイン！！

横一線に斬りつけるが雪蓮は防いだ

が…

パラパラ…

雪蓮「なっ！！！？（黒い砂！？マズッ！！！？）」

『消えたまえ』

カチッ

剣を地面に擦りつけ、火花を起こす

ボガアアアアン!!!

大爆発が生じた…

雪蓮「ぐっ…く…うっ…」

雪蓮は南海霸王を握り締めながら倒れている…

『ちっ…卿の宝は貰った』

雪蓮の手から南海霸王を奪い取る

雪蓮「返…せ」

『卿にもう用は無い…生き長らえるもよし、朽ちるのもよし。』

松永久志は振り返りこの場を去ろうとするが…

麗羽「猪々子さん…斗詩さん…っ…」

麗羽が部下二人の亡骸をみて涙を流していた…

『卿も二人の下に送ってやろう』

左手を麗羽のいる方向に向け…

コトコトコトコト...

麗羽の周りを大量の火薬が半球体状に包み...

パチンッ

ズガアアアアアアア！！！！！！！

これまでの非じゃない爆発が起き...

爆発が起きた場所に三人の姿は跡形もなく消えていた...

『さて...次なる宝を求めるとするか...』

雪蓮「あそこまで...あそこまでする必要は無い筈よ...!?」

雪蓮は叫ぶがそれを無視して松永久志はこの場を去っていく

この戦の勝者はいなかった

いや、本当の勝者も松永久志とは誰も思えないだろう

彼は歴史の表舞台になど興味は無いからだ…

孫策は負傷、袁紹軍は実質崩壊

孫策は王を降り、孫権に託す

劉備軍も着実に兵力を増やしていった…

どんなに大きな戦があろうと宝が無ければ松永久志は出てこない

次はいつ出てくるのか…松永久志は刃を研ぎその時を静かに待っていた…

四話

赤壁から二年

蜀の劉備は呉との同盟を未だに結んだまま南蛮に平定へと向かう

天下を二分にした呉と蜀…

互いに切磋琢磨し、呉と蜀で天下を治める事になった

孫権率いる呉は山賊を討伐する為に豫州へ向かう

そして蜀は南蛮…

だがこの時、蜀は時間を違えた

乱世の梟雄、松永久志は南蛮に来ていた

孟獲の持つ祝融の命火である

祝融の命火は伝説の幻神獣、鳳凰の炎を象った焼き壺の事である

祝融も火の神の血が流れている

火の神の末裔とも言われている

松永久志は久しぶりに心が踊っていた

『祝融の命火…決して焼き崩れる事の無い壺…これ程の宝がまだあったとは…』

松永久志の乱入よって蜀と南蛮…

二つ軍が乱戦を起こす事になる

だがこれは南蛮平定戦ではない・

これは松永久志による…

南蛮殲滅戦

南蛮の地に入った蜀軍…

紫苑「……………おかしいわね…」

翠「ああ、先鋒隊の奴等の話によると所構わず襲いかかってきたらしいが…」

翠と紫苑は周りの静けさを不気味に感じながらも行軍する

焰耶「桃香様、何も桃香様自ら出向かう事など…」

桃香「ううん、私が行って私が話さないと…話せば分かりあえると信じているから。それが御主人様の願いでもあるし」

焰耶「親方様の？」

北郷一刀は現在怪我が治り、天の御使いとして皆を支えている

また剣術を学んでいる

翠「タンポポは先鋒隊だったし…伝令の一つくらい…」

ドガアアアアアン!!!!!!!!!!!!

皆「「「「つ!!!!!!!!!!!!!!?」「」「」

密林の奥から爆発の大音響が聞こえた…

翠「今は!?!」

紫苑「奥からみたいね…」

翠「敵の畏か？ええい！！？とりあえず行くぞ！！」

孟獲の拠点（家）

美以「ひっ！！な、なんなのニヤ！？お前は一体…！！」

『 卿の宝を貰いに来た…祝融の命火を貰おうか』

美以「ひっ！？」

ザシュ！！

美以「いぎっ！！？」

「フン」

グジュ！！！！

ドサッ…

松永久志の剣が美以の心臓を抉っていた…

コトッ

部屋にあった祭壇の上に目的の壺があり、それを手に取る

『素晴らしいな…こつこつ品こそ宝として価値がある』

松永久志は孟獲の拠点（家）を出て…

『もう此処に用は無い』

松永久志が少し前に歩き…

パチンッ

ドガアアアアアン！！！！！！！！

拠点が大爆発した…

蒲公英「貴方だれ！？今の爆発も貴方なの！？」

『卿は誰だね？名を訊ねる時は我が名を連なれば礼に欠くと言うのを知らないのかね？』

蒲公英「たんぽぽは馬岱！！蜀の先鋒隊の隊長だよ！！」

槍を構えながら答える蒲公英

『蜀…？すまないが記憶に無いな。』

蒲公英「蜀を知らないの！？劉備様率いる大国、天の御使い様が一緒に戦ってくれているんだよ。」

松永久志は天の御使いのところで反応する

『天の…ああ、かつて私が斬り伏せた青年かね？てつきり死んだものかと思っていたのだが…』

蒲公英「え…？」

衝撃の事実には呆然とする蒲公英

蒲公英も北郷一刀から話を聞いていた

関羽や張飛…趙雲を殺した仇だと言う事を…

蒲公英は関羽達を知らない

だが北郷一刀がその時だけ悔しそうに涙を流しながら語っていたのは印象深かった為、嫌でも覚えていた

蒲公英「貴方が皆の仇…御主人様の仇！！！」

蒲公英は松永久志に突っ込んだ

皆の仇を討つ為に

だが彼女は選択を誤った

『降りかかる火の粉は払わなければな…それ以上の炎で』

パチンッ

ドガアアアアアン!!!

一方馬超達は…

翠「この奥だな!!!」

紫苑「気を付けてね翠ちゃん。」

馬超、黄忠は自分の隊を連れて先鋒隊のいる場所に向かい…

翠「見えた！！先鋒隊の旗だ！！」

辿り付いた…だが

翠「な…何だよ…これ…？」

そこにあつたのは燃えている旗や兵糧、倒れた兵士達だった…

翠「おいお前！？大丈夫か！？一体何があつたんだ！！？」

辛うじて息のある兵士に話しかける

兵士「しよ、將軍…馬岱様が…このち…きで、戦…っております…」

翠「タンポポが！？敵は南蛮兵か！？」

兵士「あれ……は……妖……術使い……の……男」

ガクッ

翠「おい！！しっかりしろ！！おい！！？」

紫苑「翠ちゃん……もうその人は……」

紫苑が翠を宥める

翠「この先でタンポポが一人で……紫苑！！悪い先に行く！！！」

紫苑「ちよつと翠ちゃん！？」

紫苑が後ろから呼び止めているが翠は馬に乗り先を急いだ

馬に乗って進む事三分

前方から一人の男が歩いているのが見えた

翠はその男の方へと向かう

翠「その男！！槍を持った女を見なかったか？私に少し似ている少女んだけど…」

『少女…？ああ、卿に良く似た少女ならこの先にいたな。』

翠「本当か！？助かつ…」

『まあ今は炭になっているかも知れないがね…』

礼を言おうとした翠は止まった

今、なんて…？

『しかし中々しぶとかったな、私の火薬をことごとくかわせるとは…まあ他の兵士諸君は気の毒だったがね』

馬超達が来る前の状況

少し時間を遡る

『ほう…？あの爆発をかわしたのかね？』

蒲公英「ケホツケホツ…何今の、爆発なんてズルいよ!!」

少し焦げた蒲公英が黒煙から姿を現した

兵士「馬岱將軍！！援護致します！！！」

蒲公英の後ろから兵士が現れた

先程の爆発で何事かとやってきたのだ

兵士「弓兵構え！！射てえ！！！」

数百人の弓兵から矢が放たれた

『随分統率が執れているな…いやなに、少し関心したただけだ』

松永久志は大量の火薬を周りにばら撒き…

『焰界』

ズガアアアアアアアアアア!!!

爆発と共に周りが火の海と化した…

「ギャアアア!!!」

「熱い!!!焼けっ!!!?」

兵士達が火の海に吞まれていく

蒲公英「皆!?逃げて!?こんなところで命を落としたら駄目!!!」

だが周りは火の海

逃げれる筈も無く、兵士達は燃え尽きていった…

『さて…後は卿だけが…』

蒲公英「ひっ、た…たんぽぽは逃げさせて貰おうかな…なんて…」

『では逃げ切って見たまえ』

松永久志はゆっくりりたんぽぽに歩いて行く

蒲公英「え？えと、逃げなきゃ！！」

蒲公英は馬に乗り込み南蛮の奥へと向かった…

蒲公英は逃げた

密林の奥へ…

蒲公英「ハア…ハア…暑いなあ…」

南蛮特有の熱帯雨林

暑さのせいか馬もそろそろバテてきている

蒲公英「でも援軍に来てくれる姉様達に伝えなきゃ…違う敵が現れ
たって…」

『その敵とは私の事かね?』

蒲公英「なっ!?!」

ザシユ!!!

馬の足を切り落とし…

ガシツ!!!

馬の上にいた蒲公英を捕まえた…

首元を掴んで…

『成る程…卿のしぶとさはその姉に私の事を伝える為か…随分と美しい姉妹愛ではないか』

蒲公英「な…んで？いつたんぽ…ぽに追い…ついたの…？」

ガシャン

蒲公英は武器を離し、両手で松永久志の左手を掴む…

苦しみから解放されたいが為に

『武器を手放すとは、降伏か死と言う事と同じだが？』

下に落ちた武器をみながら左手に力を入れる

『なに、卿は気付かない内に同じ場所を回っていたのだよ。まあ、周りが火の海だから火の無い所を回っていたに過ぎないがね。』

蒲公英「まさか…それ…も計…算のうち……だっ、て事なの…！
？」

周りの火の海と、現在首が絞められていて呼吸がしにくい蒲公英は両手で抵抗するも意味が無いようだ…

目の光も無くなってきた…

『卿のような子供には見戯でも通用するようだ…さて、卿には死を贈り…』

そう言って腕に力を込め…

蒲公英「助…けて…何…でも、じま…ず…がら…」

蒲公英は墜ちた…

誇りや仲間の事を忘れ、ただ生きたいと…助かりたいと願った

『やれやれ…死ぬ間際位、誇り高く要るべきだが？』

ドサッ！！

松永久志は蒲公英を地面に落として…

『何でもすると…そう言ったかね？』

苦しそうに喉を押さえている蒲公英にそう聞いた

蒲公英「っ!?!? (コクコク)」

喉がやられて喋れないのか、頭を上下に動かす

『では卿の名前を頂こうか…』

左手で蒲公英の顔を包み込む様に掴み…

手を離した…

『卿の馬岱と言う名…歴史に名を残す位の名前なら、宝としての価値はある』

左手で淡く光る【何か】を持っていた

蒲公英「たんぽぽの名前……たんぽぽは……蒲公英……」

『ああ、そうだ。卿の名前は蒲公英だ。もうその名しか卿は持ち合わせて居ないのだから……』

蒲公英「たんぽぽは……生きてるの……？」

『ああ、卿は私の【物】だ。私の盾となり、身を呈して私の命を守る道具だ。卿の生きる意味と存在理由はそれだ。』

意識が朦朧としている蒲公英にそう答える

蒲公英「たんぽぽは……貴方の……盾」

『そうだ。卿はこの場から離れたまえ。私の拠点に先に行っておい

てくれ』

蒲公英に地図を渡してその場から離れる松永久志

『良い駒が揃ってきたか…さて』

蜀軍が居た方向に歩く松永久志

『他の宝も見てみるか』

そして馬超に出会う

翠「お前！！たんぽぽを！！！！？」

りの威力になっている

『まあ、怒りで我を忘れた人間の攻撃は、読みやすいがね』

キイイイン!!!

翠の突きをかわし、腕が伸びきった刹那、槍が弾かれた

翠「なっ!?!しまっ!?!?」

『単調な程、無駄な力が入り、こうして武器が簡単に弾かれる』

ズバツ!!!

翠「ぐあ!!!」

松永久志の横一線斬りが翠の腹を斬り…

『卿の敗因はその短慮さ故…頭に血が上った人間の相手は簡単なものだ』

ヒュンッ

キーン！！

松永久志の頭目掛けて矢が飛んできたが右手の剣でそれを弾く

『攻撃動作が終わった後の隙を狙うのは定石通りだが…』

紫苑「……クッ……」

ザッ

紫苑のいる方向へ向き直る

ビュン！！

紫苑が弓矢を三本発射し…

カチャ

射ったすぐ後にもう矢を構えていた

『おっと、流石だな』

最初の矢をかわし、紫苑を見やる

紫苑「弓を使う人の弱点は基本的に二つ。一つはさっき言った隙…
もう一つは接近戦。どうしても弓は中々遠距離の戦いになりますか
ら…」

『だが卿はそれを克服した…そう言いたいのかね？』

紫苑は静かに頷く

『そうかね、だが弓の弱点はまだある。例えば…』

パチンッ

ドゴン！！

紫苑「なっ！！!?」

松永久志が指を鳴らすと紫苑の足下から巨大な岩が現れた

紫苑「クッ！！」

が、それをギリギリかわす

『その辺は気を付けたまえ…火薬が舞っているぞ』

紫苑「っ！？しまっ！！！」

パチンッ

ドガアアアアアン！！！！

紫苑の居た場所が大爆発し、紫苑の姿が見えない

『弓の弱点、不足の事態の時に防ぐ方法が無いと言う事だが…』

もう聞こえていないか………』

松永久志は再び歩きだす

松永久志が去つて後…

紫苑「す……いちゃん………」

紫苑は地面を這いずりながら、翠が倒れている場所まで向かう

翠「……………」

紫苑「気を…失っている…でも…き…けん……………」

バタッ

紫苑はその場で力尽きた…

四話（後書き）

祝融の命火とかはフィクションです

団体や地名と関係ありません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2595z/>

松永久秀を受け継ぐ者

2011年12月18日03時05分発行